

Title	大河原知樹君提出学位請求論文審査要旨
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	2002
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.71, No.4 (2002. 11) ,p.160(638)- 165(643)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20021100-0160

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

大河原知樹君提出学位請求論文審査記録

副論文・Catalogue des Registres des Tribunaux Ottomans
Conservés au Centre des Archives de Damas
(Damas, 1999)

論文題目「近代ダマスカスにおける社会と家族」

論文審査の要旨

大河原知樹君提出の博士学位請求論文「近代のダマスカスにおける社会と家族」は、以下のような構成からなっている。

カシオン山の麓に広がるシリアのオアシス都市ダマスカスは、「これぞ東方イスラム世界の楽園なり。その眩き陽光の差ししるといふ。われらが久しく探し求めてきた、これぞ究極の世界、〈イスラム世界の封印〉なり」と詠われるほどその美しさ、壯麗さにおいて古来、多くの人びとを惹きつけてきた典雅なる町である。

古代オリエント時代からギリシア・ローマ期を経てイスラム時代に至るまで連綿と数千年にわたる歴史を紡いできたこの町は、底知れぬ魅力を秘め、多彩な研究対象にあふれる。大河原君提出の論文は、こうした長い歴史を有するダマスカスについて時期を一九世紀後半から一九三〇年代までの近代に定め、そこでの社会と家族を歴史人口学の観点から明らかにしようとするものである。

- 主論文
- I 研究編
 - 第1章 研究史と史料
 - 第2章 ダマスカスの都市構造
 - 第3章 ダマスカスの世帯規模と構造
 - 第4章 婚姻からみたダマスカスの社会と家族
 - 第5章 出生と死亡からみたダマスカスの社会と家族
 - 第6章 結論
- 補遺
- 文献目録
- II 史料編
 - 1・徵稅台帳 (*Rüsum Defteri*) —19世紀のダマスカスの不動産分布を示す一史料—
 - III 史料編
 - 2・オスマン朝末期のダマスカスの世帯構成
—BDS作成の試み—

ラシア社会の人口・家族構造比較史研究」に参加するなかで生まれてきた成果のひとつである。

歴史人口学の研究を進めていくためには計量的な分析に堪える史料の存在が不可欠である。しかし、これまで中東イスラーム世界を対象とする研究においてはそれに応えることのできる史料は必ずしも十分に知られてこなかった。大河原君はこの空白を埋めるべく一九九三—一九九五年、一九九七—九年の二度、あわせて四年間にわたるダマスカスでの留学、滞在の経験を生かして史料の発掘にひとめ、研鑽に励んだ。

本論文「I 研究編」の第1章「研究史と史料」はその知見が縦横にいかされたものである。シリアは、一六世紀はじめにオスマン朝の征服をうけ第一次世界大戦が終わるまでその支配下にあった。この長い時代に膨大な量の行政、財政、司法関係の文書がトルコ語、アラビア語で書き残され、それらはイスタンブルにある総理府文書局、ダマスカスの歴史文書館に所蔵されているたり、人知れないかたちで私蔵されている。

こうした文書群のなかから大河原君は近代のダマスカスにかかる歴史人口学研究にとってきわめて有用な四つの文書を発掘した。第一は一八五二年に作成され現在、イスタンブルの総理府文書局に収蔵されている徵稅台帳である。これにはダマスカスの諸街区にあつた商業・産業施設、工房、住宅、公衆浴場、製粉場などの不動産物件二六、〇〇〇件が記録にとどめられている。それを逐一校訂したものが「II 史料編1・徵稅台帳 (Rüsum Defteri)」である。

第二は、ある街区の長（ムフタール）によって私蔵されてきた一九〇七年の戸籍台帳である。シリアでは戸籍台帳を閲覧することは、今のものでも過去のものでも許されていない。これはオスマン朝時代のものといえども個人のプライバシーを侵す恐れがあるからである。こうした困難な事情があるにもかかわらず大河原君は一九〇七年の戸籍台帳のもとにになった控えの台帳を発見した。それを特別の許可をえて、かつ現在でもダマスカスに住む関係者たちに迷惑がかからないよう配慮して歴史人口学研究にとつて基礎となる BDS (Basic Data Sheet) のかたちに整理したものが膨大な「III 史料編2・オスマン朝末期のダマスカスの世帯構成—BDS作成の試み」である。

第三と第四の文書は、一九七〇年代以降閲覧が許されるようになったダマスカス歴史文書館所蔵のイスラム法廷関係史料である。一九〇二年から二七年にわたる婚姻許可台帳、一八九二—一九四年の死亡台帳がそれにあたる。

第1章において大河原君はこれら文書にかんする書誌、歴史人口学研究にとつての意義について論じる。その文献学的な蘊蓄には啓發されねむいろが多く、フランス高等研究院のアラブ研究者 Brigitte Marino 女史との共著で、副論文として提出された Catalogue des Registres des Tribunaux Ottomans Conservés au Centre des Archives de Damas (Damas, 1999) をふまえた画期的な史料譜となりしこ。

ただ研究史の部分は、史料のそれにくわぐると必ずしも整理が十分に行き届いていないという印象は否めない。ダマスカス

の都市史については一九二〇年代以降のフランスのシリア委任統治時代にはじまる地誌研究の蓄積、ヨーロッパ中世の自治都市論を念頭におきつつイスラム都市としてのダマスカスの特質を探ろうとしたフランスのアラブ史家Sauvagetの研究、ダマスカス周辺の農村の社会構造を視野に入れながら名望家層の都市支配の実態に迫ろうとしたシリア人の近代史家Rafeqなどのすぐれた研究がある。そうした流れのなかで大河原君自身の歴史人口学的な視点からするダマスカスの社会史、経済史への展望がもう少し強く出せればよかつたように思われる。

第2章「ダマスカスの都市構造」では、徵稅台帳に主として拠りながらダマスカスの市街地を構成する諸街区の問題と産業・商業構造を分析しつつ一九世紀中葉におけるダマスカスの社会がいかなるものであったのかを描こうとする。まず街区について大河原君は、すでに述べたSauvagetが唱えるモデル論的な考え方を批判する。Sauvagetによると、ダマスカスの各街区はモスク、小市場、公衆浴場など日常生活にとって必要なハンドな施設を過不足なく備えるそれ自体、独立したダマスカスという大きな都市の中のミニチュア都市だと主張する。しかし、大河原君は徵稅台帳に記載されている各街区の住宅、工房、市場、隊商宿（キヤラバンサライ）などの分布を克明にたどりつづ当時のダマスカスは、住宅空間と産業・商業空間は分離する傾向が強かつたと指摘しSauvagetの考えをしりぞける。

次いでダマスカスという都市社会がよつて立つ産業、商業的な基盤の問題に論を移す。従属理論、その系譜をひく近代世界

システム論においてはヨーロッパ資本主義による世界経済の一体化が進むなかで中東イスラーム世界は中核であるヨーロッパに対して周縁地域化していく、ダマスカスでは伝統産業の中心を占めてきたダマスコ織りに代表される纖維工業は衰退したという説がこれまで支配的であった。これに対して大河原君は徵稅台帳に出てくる纖維産業関係の工房がかなりの街区に数多く残ること、またダマスコ織りに代わるディーマー織りがさかんになつたという事実を反証として挙げながらダマスカスの纖維産業は一九世紀後半になつても通説のように衰退してはいなかつたと反論する。

以上の街区論と産業・商業構造論が第2章の骨子をなすが、これらがより説得力をもつためには次の二点においてさらに吟味が必要のように思われる。第一は、Sauvagetのモデル論がもともとイスラム都市全体のあり方について言わたるものであつて、これを街区にまで拡大解釈していいかどうか慎重に再検討しなければいけないということである。第二に纖維工業衰退説に対する反証は、徵稅台帳記載の産業・商業施設の数と分布を主に根拠としているが、これだけでは不十分であり、近代におけるシリアの経済史全般を世界経済のなかで位置づけたうえでダマスカスの産業・商業構造をみていく必要があるようと思われる。

第3章「ダマスカスの世帯規模と構造」は、一九〇七年の戸籍台帳を使って家族の問題が論じられる。これの鍵になるのは、アラビア語の「ハーネ」という言葉である。これについて一九

五〇年代以降、検地帳という史料を駆使して近代以前におけるオスマン朝支配下のアナトリアの家族史・人口史研究に先鞭をつけたトルコ人の学者 Ömer Lütfi Barkan と、近代のイスタンブルの家族について戸籍台帳に拠って斬新な研究を発表した二人の中堅のトルコ人学者 Duben と Behar が、「ハーネ」という言葉を一貫して「世帯」と同義に理解し研究をおこなつてきた。

これに対しても大河原君はダマスカス戸籍台帳の記載単位についている「ハーネ」を単純に「世帯」としてとらえることに疑問を呈する。「ハーネ」を構成する人たちを戸籍台帳から拾い上げ、その実際のあり方を調べてみると、血縁関係にある者が多くを占めるることは間違いないものの、そのなかにはエチオピアやチャルケスの家内奴隸、奉公人などさまざまな非血縁者も含まれ、さらに親族とはいえない複数の家族が同じ敷地内にいっしょに住んでいることが確かめられる、というのがその理由である。

しかし、以上のような立論にもいくつかの問題点が存在する。第一は戸籍台帳がダマスカス全体のものでなく一つの街区のデータにすぎないということである。第二に親族関係にない複数の世帯は単に賃貸借関係にもとづいて中庭を囲んでつくられる集合住宅に居住していた可能性も大きく、どこまで多核的な同居世帯の一員としての意識を有していたのか疑問である。この点を確かめないと大河原君の論は説得力を増さないように思われる。

第4章「婚姻からみたダマスカスの社会と家族」は、イスラーム法廷の裁判官（カーディー）によって一九世紀後半以降作成されるようになつた婚姻許可状という新出史料を駆使した婚姻論である。中東イスラム世界には、ヨーロッパ・キリスト教世界の教区簿、日本における徳川幕藩体制下の宗門改帳、人別改帳のような婚姻の実態を計量的に明らかにできるような史料が近代になるまで存在しなかつた。婚姻はあくまでも私的な行為とみなされ、聖職者も国家もこれに踏みこむことができなかつたのである。しかし、一九世紀をすぎると、オスマン朝は婚姻にともなう税、手数料を徴収することによって国の財源を確保していくという政策から次第に婚姻への関与を強め、イスラ

ム法廷の裁判官による婚姻許可状の発行を通してそれを掌握していこうとした。

大河原君は以上のような経過をふまえて婚姻許可状の内容を丹念に分析し、男女の性比、平均婚姻年齢の推移、季節によつて異なる婚姻件数の多寡、配偶者の選択、一夫多妻といった婚姻をめぐる基本的な問題について論じる。なかでも興味をそそられるのは通婚圏を街区ごとに明らかにし、それを通じてダマスカス住民の人口移動の趨勢をみようとする試みである。それによると、街区という狭い範囲内で結婚がおこなわれる例が多かつたことが認められる。もしこの通りだとすると第2章で批判された Sauvaget の「ニチュア都市論は婚姻という観点からみると適合性をもつともいえ、これにどう答えていくかが大河原君に残された今後の課題である。

第5章「出生と死亡からみたダマスカスの社会と家族」は、戸籍台帳、死亡台帳などの史料を組み合わせながら一八八八年から一九三五年までの約五〇年間にわたる長期の人口動態が出生と死亡を軸に論じられる。多核家族世帯との関連で出生にかんしては一般的に多産というイメージが先行しているきらいがあるが、大河原君は丹念に史料を吟味するなかでダマスカスにおける出生率はヨーロッパの主要4カ国の統計とくらべても決して高くなかったと指摘する。そして死亡率についても同様のデータと論を展開しつつ、総じてオスマン朝末期からフランスの委任統治初期にかけてのダマスカスの人口動態は出生、死亡とも高いものでなく、それが増加の傾向を示すようになるのは

一九三〇年代なかばを過ぎてからである、と強調してこの章を終わっている。

多産論を具体的な事実にもとづいて払拭し、反論を加えたことは、大河原君の大いなる貢献である。ただこれを当時の中東イスラーム世界全体の傾向としてとらえていくにはもう少しマクロな史料の収集をふまえ慎重に分析をしていかなければならぬと思われる。また出生率、死亡率の原因がダマスカスの社会に深い影響を及ぼした第一次世界大戦、その前後の時期における飢餓、疫病などを通して語られるが、背景の説明としては一般的にすぎ、統計資料にもっぱら拠つて論じるだけでは不十分である。これ以外の記述史料を利用して広い視野から有機的に相関関係を提示していく工夫をしていくことが必要であるようと思われる。

第6章「結論」では以上述べてきた事柄について簡潔に総括し、今後の中東イスラーム世界をめぐる家族史・人口史研究への展望を述べる。これをふまえて大河原君の論文の全体的な評価について最後に触れておくことにしたい。この論文の最大の功績は今までまったくなされてこなかつた中東イスラーム世界における歴史人口学の問題をダマスカスという都市社会に場を設定し、それを研究していくのに十分に堪えうる史料を発掘して論じたところにあるといつていいだろう。

しかし、中東イスラーム世界の歴史人口学的研究は、ようやく端緒についたばかりであり、史料的にも方法論の面でも欧米、日本の水準に達するにはまだまだその道のりは険しいといわな

ければならない。その差を埋めるために史料の発掘にますますつとめ、計量的な経済分析を今以上に押しすすめていく必要がある。また統計処理の手法だけに満足することなく、家族の問題をその人間関係のなかでその心性にまで触れながら社会史的に追っていくことも考えてみなければならぬはずである。

これにつけて思い出すには、エジプトのノーベル賞作家ナギー・マフフーズの『バイナル・カスライン』という小説である。一九世紀後半から二〇世紀前半にかけての時期におけるカイロの下町に住む商人家族の生きざまを描いたこの大河小説は、中東イスラーム世界における家族の心象風景をあざやかに浮き立たせてみせたが、こうした手法にならつてダマスカスにおける家族の心性の問題を歴史的に追っていくような試みをぜひともしていただきたいものである。

大河原君に期待される課題は限りなく大きい。今回提出された博士論文は、史料にたいする飽くなき探求の精神に支えられて量的にも質的にも中東イスラーム世界における歴史人口学のフロンティアを切りひらいていこうとする意気込みにあふれた大作となつており、審査委員一同、博士（史学）の学位を授与するにふさわしい十分なる価値をもつと判断するものである。

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授・文学研究科委員 坂本 勉
副査 慶應義塾大学商学部教授 湯川 武
副査 お茶の水女子大学文教育学部教授 三浦 徹